



JAC GUNMA

公益社団法人

日本山岳会

群馬支部報

第22号

2024年
5月10日

全国支部懇 みなかみ・谷川岳で開催

24支部から160人が参集 懇親、ハイクで交流楽しむ

橋本会長「重荷は分け合い、ともに夢を語ろう」

「近くて良い山 谷川岳に集う」を大会スローガンに、日本山岳会の第36回全国支部懇談会（群馬支部主催）が昨年9月23、24日の2日間、利根郡みなかみ町の谷川岳エリアを会場に開催された。全国から集まった約160人の会員が講演会や懇親会、谷川岳山麓ハイキングなどを通じて和やかに懇談、山仲間との充実した交流を楽しんだ。

本県で全国懇が開催されるのは初めて。全国懇は

2019年に栃木支部主催により奥日光で開かれて以来、コロナ禍の影響などで中断されており、4年ぶりの開催となった。群馬支部が昨年7月、設立10周年を迎えたことから記念事業の一環として誘致を決め、一昨年からの開催場所の検討や講演会などの準備を進めてきた。

初日の23日午後、会場となった水上温泉の坐山みなかみ（旧水上館）には、北は北海道支部から南は



晴れ渡った一ノ倉沢出合で、記念写真に収まる全国支部懇談会の参加者一同



4年ぶりの「支部懇」に続々と集まる仲間たち

宮崎支部まで、全国24支部から会員が続々と集まり、ロビーは旧交を温めあう人たちの声が飛び交った。参加者は、本部役員、各支部、個人会員156人のほか、群馬支部の約20人が受け付けや送迎バスなどの案内などスタッフとして携わった。集合後、同ホテルで講演会が開催された。講師は群馬県警谷川岳警備隊長の伊藤武さんで、通算18年間にわたり警備隊で遭難者の救出や遭難防止活動を行っている経験をもとに、実際の遭難現場の状況と遭難に至った原因についてケースごとに詳細に説明、「新型コロナの5類移行後は登山者が増加し、遭難が増えてきた。山のベテランであってもちょっとした心の油断が思わぬ事故に結びつく。常に登山者として初心の心構えを忘れずにいてほしい」と呼び掛けた。会場からは隊員の訓練の状況、経験年数など質問が相次いだ。

懇談会は、地元みなかみ町の人たちによる勇壮な三国太鼓のステージで幕を開けた。冒頭、群馬支部の根井康雄支部長が「群馬支部は発足して10年とまだまだ若い支部だが、本日の懇談会には全国の山仲間の皆さんと区切りの周年を祝いたいという支部会員の気持ちが込められている。この経験を支部成長の糧にしたい。この2日間、水上温泉の名湯と谷川岳の自然を満喫していただきたい」と歓迎のあいさつを述べた。続いて、昨年6月に女性初の日本山岳会会長に就任した橋本しをりさんが登壇し、「重荷は皆で少しずつ分け合って背負い、眺めの良い場所では汗をぬぐい、それぞれの夢を語り、共感しながら同じ山を見つめる仲間たち。それが私たちの山岳会だ」と、ベテラ



群馬県警谷川岳警備隊長伊藤武氏による講演会でスタート

ンから若手まで会場を埋めた山仲間たちにその思いを語りかけた。地元みなかみ町の阿部賢一町長は来賓あいさつで、ユネスコエコパークにも指定されている利根源流の町みなかみをアピールし、歓迎の言葉を送った。

懇親会場には谷川、赤城、榛名、妙義など群馬の山の名前がつく日本酒が並べられたほか、各支部から地元を代表する銘酒、焼酎などが持ち寄られた。乾杯のあとは会場のいたるところに歓談の輪ができ、再会を喜びあいながら山談議に花を咲かせていた。

翌24日は朝から抜けるような快晴。参加者たちは谷川岳インフォメーションセンターまでバスで移動。一ノ倉沢出合まで、さわやかな風と日差しを浴びながら思い思いのハイキングを楽しんだ。

次回全国支部懇談会は今年5月25、26日、神奈川支部主催で同県平塚市で開催される予定。



三国太鼓の演奏で始まった懇親会

10周年記念トレッキング ヒマラヤ・ダウラギリベースへの旅

日本山岳会群馬支部は創立10周年を記念したヒマラヤトレッキングを昨年11月8日から18日までの11日間の日程で行った。参加者は、同支部の11人（隊長の八木原罔明さん、根井康雄支部長、中山達也さん、前田文彦さん、田村和彦さん、瀬沼聡さん、星野弘美さん、中村由佳理さん、浦野有紀子さん、植木康夫さん、木暮幸弘）のほか、群馬ミヤマ山岳会の関係者5人の合わせて16人（植木康夫さんは途中までご一緒した前橋山岳会の小泉俊夫さん、中沢丈一さんとともに別行動）。1978年に八木原罔明さんが登攀リーダーを務めた群馬の遠征隊がダウラギリI峰南東稜に世界初登頂した際、ベースキャンプ（BC）を設営した標高4200m地点を目指した。以下は今回のツアー11日間の振り返り。（木暮 幸弘）

■11月8日（1日目）

成田空港に9時集合。このためメンバーの多くが前橋駅南口午前3時50分発のアザレア号で成田空港へ。乗るのはネパール航空カトマンズ直行便。11時



ネパール航空直行便で成田からカトマンズへ



ネパール第一夜はチベット鍋「ギャコク」で

発の予定が、離陸したのは12時40分だった。カトマンズ着は21時過ぎ。

空港は人、人、人でごった返し。2台のワゴン車に分乗してホテル「マーシャンディ」へ。ホテルから歩いて10分ほどの繁華街にある「ウツツェ」という食堂で夕食。ギャコクという鍋料理はほどよい塩けがおいしかった。食堂の上階は八木原さんがカトマンズ滞在中、常宿にしていたとのことで、店に入るなり八木原さんが女将さんとハ

グするシーンは感動的だった。

夕食後はホテルに戻り、荷物の仕分け。ここで旅行会社から渡された60リットルバッグに山に持って行く衣類や装備などを詰め替える。いらぬ荷物はスーツケースに残してホテルに預かってもらう。

■11月9日（2日目）

6時朝食、7時45分ホテル出発。9時50分の国内線でカトマンズからポカラへ移動。30分ちょっとの遊覧を楽しむ。ポカラ空港からホテル「レイクサイドドリトリート」まではワゴン車2台で移動。昼食はホテル近くのレストランでダルバートに舌鼓。



ネパール料理の定番ダルバート

■11月10日（3日目）

ジョムソン行き6時30分の飛行機に乗るため、5時半にロビー集合。お弁当を受け取り、ポカラ空港へ。20人乗れるかどうかといった双発の小型飛行機に乗り込んで、20分ちょっとの遊覧飛行。右側の人はアンナプルナ、左側の人はダウラギリがよく見える。コックピットとの境にあるカーテンを開けてくれ、前方にダウラギリが見えた瞬間、歓声が上がった。予定の飛行機よりも時間を早めたのは、気流の関係で遅くなればなるほど飛べなくなる可能性があるからとのこと。

ジョムソン到着後、専用バスでタンチャールのロ



ジョムソンに到着

ッジへ移動。途中、マルファという村に立ち寄り、1時間ほど村人と交流を図った。ロッジ「ホリデーキャンプ」泊。

■11月11日（4日目）

プロローグは終了、いよいよトレッキングのスタートだ。標高2500mちょっとあるタンチャールの



ヤクを見ながら

ロッジを8時半すぎに出発。車が通れる未舗装の道を20分ほど進んだところから山道に入る。針葉樹の樹林帯を行くとヤクの群れが草をはんでいる草地に出た。200頭近くはいそうか、放牧している本物のヤクを見るのは初めてだ。脇を抜けて進む。石段もあってなかなかいいトレッキングの道と思っていたら、沢にかかる橋を渡ったあたりから本格的な登山道になってきた。同行のガイドに聞いたら登山道ではなく、ヤクが通ることのできた「ヤク道」とのこと。いたるところに落ちている「爆弾」を踏まないように歩く。

標高3600mの地点に着いたのは13時を少し回っていた。当初はここがキャンプ地の予定だったが、沢がなく水を確保できないことから上に移動したという。

この後、標高差100m以上のルンゼが待っていた。富士山とほぼ同じ高さのヤク道をジグザグに登る。少し登ってはひと休み、時間がかかる。

ルンゼをクリアする手前あたりからあられが降り始めた。その量はだんだん多くなってついに雪に変わった。明日は大丈夫か、不安がよぎる。

ルンゼを抜けて3700m地点、八木原さんに飲みかけのアミノバイタルを渡したらおいしそうに飲み干した。行動食や昼飯もとらずに歩き続けて6時間、シャリバテ寸前だったところでティータイムとなった。ビスケットと温かい紅茶が胃袋に染み渡る。

3800mのキャンプ地に着いたのは15時半すぎ。標高差1200m以上ある、およそ7時間の行程だった。先頭の班から遅れること2時間。それでも全員キャンプ地に到着できた。夕食はきしめん風の煮込みうどんと大きなアップルパイだった。全員一つの大きなテントに集まり、おいしくいただく。気温は氷点

下に近いひとケタ台、温かい料理が何よりだ。ちなみにテントやシュラフなどは、前日にポーターがメンバー全員の60リットルバッグとともに運び上げて設営しておいてくれたので、すごく助かった。うれしいことに湯たんぽまで用意してくれて、テント泊も全く苦にならなかった。根井支部長はこの日より後方支援に回った。

■11月12日（5日目）

いよいよきょうはBCを目指す日。高ぶる胸を抑えてテントを出ると、ニルギリ、アンナプルナI峰、アンナプルナサウスといった山々が眼前に広がっている。振り返ればダウラギリ。ここからはI峰は見えないが、手前のピークに太陽が当たって輝いている。雲一つない快晴。昨夜降った雪もやんで積雪は7、8cm、周りの景色も白一色に変わった。充実感で胸が震える。

おかゆとパンケーキ、スクランブルエッグ、野菜炒めの朝食で腹ごしらえをして9時にスタートした。緩やかな登りを足元を確認しながらゆっくりとしたスピードで1歩1歩確実に歩を進める。昨日3800mまで頑張ったから、きょうはそれほど稼ぐ必要はない。

BCまで100mほどに迫ったところで、ツアーコンダクターの古谷さんが「ここからは八木原さんと奈良さんの2人に先に行ってもらいましょう」と声をかけた。八木原さんが前、奈良さんが後に続く。奈良弘行さんはダウラギリに登頂したメンバーの1人だ。そんな2人の力強く歩く後ろ姿を見ていたら、自然と涙があふれてきた。1978年、ダウラギリI峰南東稜に登頂は成功したものの仲間4人が命を落とした事実を突きつけられて、感情を押しとどめられ



慰霊の碑が刻まれた大岩に到着

る人は、たぶんいないと思う。

慰霊碑を前に手を合わせながら「思い残すことはありません」と大きな声の八木原さん。その声は少し震えていた。そんな姿を見て、また感情がゆさぶられて涙があふれた。77歳の八木原さんにとって45年ぶりに訪れたBCは、最初で最後の慰霊登山にたぶんなるのだろうと思った、その場に立ち会えた貴重な瞬間だった。12時45分キャンプ地に戻って昼食。その後は陽だまりで8000m級の山々に囲まれてぜいたくなティータイム。そして夕食後のデザートには特大ケーキも登場、目的地のBCまで行くことができたことをみんなで祝った。この日もテント泊。

■11月13日 (6日目)

8時50分下山開始。3800mから2600mまで一気に下ってセクン湖畔で昼食。車道に出た後、3列シートに12人が乗るといって「離れ業」で標高2700mにあるナウリコットのロッジ「タサンビレッジ」に移動。ダウラギリのピークがよく見える。ここで根井支部長と再合流。



下山しナウリコットでくつろぐ

■11月14日 (7日目)

専用バスでヒンドゥー教の聖地・ムクティナート(3760m)に移動。途中、トウクチェという集落に立ち寄り、村人の生活ぶりを垣間見る。その後ジョムソンでは2001年にダウラギリ東壁で命を落とした群馬ミヤマ山岳会の3人が眠る丘に行き、冥福を祈る。

ムクティナート到着後、ビシュヌ神を祀ったヒンドゥー教の寺院「ムクティナラヤン」、チベット仏教の寺院「ジョラムキ・ゴンパ」を巡礼。「ベストステップイン」というロッジに宿泊。

■11月15日 (8日目)

ムクティナートからジャルコットという集落まで



ムクティナートではJACグレートヒマラヤトラバース隊の重廣隊長(写真左)らとの出会いも

およそ3時間のトレッキング。ニルギリやダウラギリを眺めながら、長閑な農村地帯を歩く。その後、専用バスでジョムソンへ移動。空港近くのロッジ「ムーンライト」泊。夜、祭りの踊りを子どもたちがロッジのエントランスで披露するのを観賞、楽しいひとときを過ごす。

■11月16日 (9日目)

旅もいよいよ大詰め。早朝の便でジョムソンからポカラ、ポカラからカトマンズへ移動。ポカラ空港で見える山のおさらいをする。左からダウラギリ、アンナプルナサウス、アンナプルナI峰、マチャプチャレ、ガンガプルナ、アンナプルナIII峰、アンナプルナIV峰、アンナプルナII峰、ラムジュン。素晴らしい景色ともお別れ。カトマンズのホテル「マーシャンディ」泊。



ポカラからアンナプルナ山群を振り返る

■11月17日 (10日目)

終日カトマンズ市内観光。世界遺産パシュパティナート寺院、ネパール最大のチベット仏教の巨大仏塔ボダナート、旧王宮などを訪れる。パシュパティナートでは火葬している場面を見ることができた。旧王宮からホテルに戻りながらショッピングを楽しんだ。カトマンズ空港から深夜便で成田へ。

機内泊。

■11月18日（11日目）

成田着9時半。全員無事に帰国。みなさんお疲れ様でした。

11日間に及ぶ今回のトレッキングツアーで1人の脱落者もなく全員無事に行って来ることができたのも、参加した会員の日頃の健康管理と意気込み、家族や職場の協力などがあったからこそ。それと、この世界初のツアーをコーディネートしてくれたKAZEエクスペディションの古谷朋之社長と現地のサーダー・ディル、サブガイドのラクパとサンタ、コック長と3人のキッチンボーイ、14人のポーターの存在も忘れてはならない。家族や職場も含めて、ご協力



ダウラギリ主峰、左が南東稜

をいただいた多くの方々にこの場を借りて感謝申し上げます。ダンネバード。

10周年記念山行で大雪山へ

北海道支部と交流 確かめあえた絆

ダウラギリトレッキングと並ぶ群馬支部設立10周年記念山行として、北海道大雪山への登山が北海



姿見ノ池から旭岳を目指す

道支部との交流事業として企画された。昨年8月18日から21日までの4日間、12人が参加した。

18日は空路、羽田から旭川へ。旭川空港で藤木前支部長、清水前本部理事ら北海道支部のメンバーの歓迎を受け、レンタカーで観光しながら、夕方には旭岳温泉のユースホテルへ。

翌19日は好天に恵まれ、北海道支部会員のリードでロープウェイ駅から姿見ノ池を経て旭岳へ登頂。花の時期には遅れたが、北海道最高峰のスケール感と眺望を満喫。そして北海道の山仲間とともに頂に立てた喜びにひたった。

20日は層雲峡にまわり、黒岳を登る予定だったが、前夜からあいにくの雨となり、予定を変更。層雲峡から旭川市の旭山動物園をまわり、札幌への観光に切り替えた。札幌では北海道支部のルームで盛大なジンギスカンパーティーが待っていた。本場ジンギスカンに舌鼓を打ちながらのサッポロビール。両支部の親睦も深まった。

21日、最終日。黒川支部長の案内で大倉山シャンツェへ。リフトで最上部まで登り、眼下のシャンツェから札幌の街並みを一望し、4日間の思い出の最終ページにおさめた。両支部の交流を大切にすることを約束し、帰途に就いた。

(根井 康雄)

山行報告

夏合宿「上高地集中」

群馬支部恒例の夏の行事、上高地集中が昨年も7月22日(土)上高地の「山研」に17人の会員が集まり盛會に開催された。今回は主に3コースが設定された。



乗鞍岳

槍ヶ岳班、乗鞍岳班、焼岳班とも、北アルプスの大自然を満喫する充実した山行になった。「山研」

では、新入会員の紹介や山行報告、今後の支部の方向性など山談議に花が咲いた。

新中の湯登山口から焼岳・西穂丸山そして上高地へ

7月23日、仕事の都合で連泊による登山計画が立てられなかった私は、当日に焼岳を登り上高地へ下るコースを楽しむことにした。新中の湯登山口が明るくなり始めたころに出発。2000mを少し過ぎた辺りで休憩。正面の木々の上には焼岳の姿が現れた。途中ガスが勢いよく吹き出していて、活火山のパワーを感じた。およそ2時間で焼岳登頂。360度大パノラマに息をのむ。北アルプスの名峰が見渡せた。



活火山 焼岳

焼岳小屋から西穂山荘までの稜線歩きは初めてだ。右に上高地、左に新穂高温泉を見下ろしながら稜線を進む。途中、割谷山付近ではキスゲやユリ、アザミなどの花々が出迎えてくれた。11時を少し過ぎたころ西穂山荘に到着。これで、焼岳から槍ヶ岳までの稜線がつながった。時間を見て西穂丸山まで行くことにした。西穂丸山に到着したころには霧が発生し、西穂高岳方面は隠れてしまった。11:30上高地に向け下山開始。13:

30上高地に無事下山。梓川沿いをのんびり歩きながら、「山研」に到着。疲れをとりながら、仲間の到着を待った。(田中 規王)

尾瀬合宿に20人が参加

群馬支部恒例の秋の行事、尾瀬合宿が昨年も10月21日(土)に開催された。今回の計画は、至仏山



秋晴れの燧ヶ岳

班、尾瀬南方稜線班、燧ヶ岳班の3コースが設定された。しかし、当日の天気予報は寒波襲来の雪。この時期ならあり得

ることと想定内ではあったが、やむを得ず各班とも計画を変更することとなった。

私は至仏山の予定だったが、赤城船ヶ鼻山周回コースに変更。参加者は西田さん、清水さんの3人。赤城山周辺の天気は風もなく穏やかな晴れ。8:00登山口をスタート。登山口付近の東屋からは、県境稜線が見渡せる絶景。駐車場やきれいなトイレが整備され、さすが人気のコースだ。今回は、牛石コースから登り、楢水コースを下山することにした。



船ヶ鼻山わらび平から、西の穂名山方面を望む

途中、わらび平からは皇海山がきれいに見えた。10:50紅葉した船ヶ鼻山山頂(1466m)に到着。少し早いランチタイムを楽しみ下山開始。つじ平からは榛名山方面がきれいに見えた。また立派な大楢の木、ツタウルシの鮮やかな紅葉が見事だった。12:50無事下山。その後、尾瀬戸倉温泉旅館「玉泉」におよそ20人の会員が集まり、楽しい宴は夜遅くまで続いた。(田中 規王)

10月初旬の遭難事故に思う

10月初めの遭難のニュース。何度もみて聞いてきた。多くは低体温症。繰り返し起こり、そして注意を喚起しても起こる遭難だ。

昨年特に、お彼岸過ぎまで暑い日が続き、急に冬になったという状況だった。10月初旬に高い山では雪が降る。身をもって経験しないとわからないのだろう。

1988年谷川岳で4人が低体温症で亡くなる事故が起きた。この時期の遭難の報道をみるたびに思い起こす。西黒尾根を下山中の4人のうち3人。一ノ倉第三スラブを登っていた2人のうち1人が亡くなった。一ノ倉沢の生存者救助に群馬県山岳連盟救助隊が向かうことになり、私もそのうちの1人だった。

彼らは10月12日早朝に登り始めた。14時から小雨が降り始め、19時ようやくドーム基部へ到着。予定通りのビバークとなる。翌朝から雪になったが登り始める。ドーム登攀をあらかじめAルンゼに取り付くがスピードが上がらず、一人がおかしい行動をとり始め19時に約12m滑落。そこで2回目のビバークを決め、山岳会に無線連絡をしている最中に意識が無くなって死亡に至った。

同じ12日、天神尾根を登った4人は頂上に着いてか

ら、西黒尾根を下った。鎖場を過ぎたところで道を間違えて引き返す。そのころすでに雨が降っていた。肩の小屋を目指して登り返すが雪が降ってきて体が動かなくなってきた。元気な一人が肩の小屋に着いて救助を求めた。翌日、谷川岳警備隊と岳連救助隊で救助に向かったが3人は西黒尾根登山道で死亡していた。

13日我々は、稜線からAルンゼに懸垂下降で下って行きツェルトを発見。声をかけると意外に冷静に対応してくれた。ツェルトの外には仲間の遺体がロープで固定されていた。生存者はロープを使って自分で登ってもらい、遺体はワイヤーで引き上げた。

SNSでは登山の良かったところが強調され、誰でも簡単に楽しめる錯覚を起しがちだ。身をもって経験してからでは遅いかもしれない。遭難事例を読むことが良い疑似体験になるかもしれない。遭難を他人事としてではなく考えてもらいたいと思う。

追記:私が遭難者で書かれている「気象遭難」と、「道迷い遭難」はおすすめてです。二つとも山と溪谷社から羽根田治さんが書いています。(佐藤 光由)



ドキュメント 気象遭難

事務局だより

【主な活動・事業・イベント】…………… (2023年)

- 谷川岳慰霊祭・閉山式 (10/ 1 みなかみ町土合霊園地)
- JAC 山岳古道 PT 会議 (10/ 4 Zoom)
- 岳連理事会 (10/11 前橋・総合福祉会館)
- 支部安全研修委員会 (10/12 Zoom)
- 山フェスタ会議 (10/13 前橋・総合 PR)
- 支部役員会 (10/18 Zoom)
- 尾瀬合宿 (10/20～22 片品村・戸倉)
- 山フェスタ (10/21～22 高崎・ピエント高崎)
- 県民登山 (10/29 桐生・仙人岳周辺)
- JAC 山岳古道 PT 会議 (11/ 1 Zoom)
- 関東四支部合同懇談会 (11/ 3 栃木・塩谷町)
- 木暮理太郎翁碑前祭 (11/ 3～4 太田・生誕地の碑)
- 10周年記念ヒマラヤトレッキング (11/ 8～18 ダウラギリ)
- 支部山行・鼻曲山 (11/12 鼻曲山)
- JAC 本部「語り継ぐ山岳祭」会議 (11/20 Zoom)
- 支部例会 (11/22 Zoom)
- JAC 晩餐会 (支部連絡会議) (12/ 2 東京・京王プラザホテル)
- 国立赤城との情報交換会 (12/ 5 国立赤城青少年交流の家)
- JAC 山岳古道 PT 会議 (12/ 6 Zoom)
- 支部役員会 (12/20 Zoom)
- 安全研修委員会 (12/21 Zoom)
- 支部山行・白毛門 (12/26 谷川連峰・白毛門)

(2024年)

- 気象勉強会 (1/ 8 前橋・元気 21)
- 本部財務説明会 (1/16 Zoom)
- 支部新年例会 (1/17 高崎・ホテルメトロポリタン)
- JAC 本部「語り継ぐ山岳祭」会議 (1/23 Zoom)
- 支部山行・太田金山 (2/ 3 太田・金山)
- JAC 山岳古道 PT 会議 (2/ 5 Zoom)
- 橋本会長ヒアリング (2/ 7 Zoom)
- 支部役員会 (2/28 Zoom)
- 安全研修委員会 (2/29 Zoom)
- 支部山行・玉原 (3/ 2 玉原・スノーシュー)
- 妙義山フェスタ (3/ 2 富岡・妙義 VC)
- JAC 山岳古道 PT 会議 (3/ 4 Zoom)
- 支部例会 (3/21 Zoom)
- JAC 本部「語り継ぐ山岳祭」会議 (3/26 Zoom)
- 支部連絡会議 (3/28 Zoom)
- JAC 山岳古道 PT 会議 (4/ 3 Zoom)
- 支部役員会 (4/15 Zoom)
- 安全研修委員会研修 (ジオグラフィカ) (4/16 Zoom)
- 安全研修委員会 (4/18 Zoom)
- 支部総会 (5/15 前橋・元気 21)
- 熊野古道集中山行 (5/18 和歌山・熊野古道)
- 全国支部懇 (5/25～26 神奈川・平塚)
- 支部連絡会議 (5/30 Zoom)

日本山岳会群馬支部報 第22号 2024年 5月10日

発行：公益社団法人 日本山岳会群馬支部
〒371-0051 前橋市上細井町1200-7(根井方)
<https://shibu.jac1.or.jp/gunma/>
発行者：根井 康雄 編集者：小池 千秋・萩原 哲
印刷：上武印刷株式会社